

史跡隼人塚とその石造物

鈴木 景二

はじめに

鹿児島湾の最奥に面する霧島市国分には、かつて大隅国府・国分寺がおかれ、同市隼人町には大隅正八幡宮（式内鹿児島神社。現在の鹿児島神宮）が鎮座する。八幡宮から海岸の浜ノ市へ約3km続く古道のちょうど中間ぐらいの地点に、「隼人塚」という国の史跡に指定されている宗教遺跡がある（図1）。周囲は史跡公園として整備され、隼人塚史跡館も設置されている。この遺跡を著名なものとしているのは、他に例を見ない等身大の石造四天王像である。以前は古代隼人関係の書籍に写真がよく載せられていたが、この石像が古代隼人の時代のものでないことは明らかである。その制作時期は平安時代後期から南北朝時代まで諸説があり、「隼人塚」の名称も近代に付けられたもの¹⁾である。本稿では便宜上、隼人塚の名称を使用する。

この施設の用途は依然として未解明であるが、近年、石造物などが歴史資料としても位置付けられるようになっており、隼人塚もそうした面から改めて検討する必要がある。本稿では、藤浪三千尋氏に代表されるこれまでの研究成果²⁾に依拠して、この遺跡についての情報を整理し、その性格についての見通しを述べることにしたい。

I 遺跡の概要と関連史料

隼人塚は、鹿児島県霧島市隼人町内山田字山跡、標高15m前後の平坦地に築かれている台形の土壇で、平面は横長の長方形、古道に面する東南を正面としている（図2）。現在、上面平坦部の中央に五重石塔3基を並べ、四隅に四天王石像を配置しているが、これは1994年（平成6）度から継続的に行われた発掘調査に基づいて復元整備されたものである。調査では、以下のような成果が得られている³⁾。

塚は地山に掘込地業を行い版築により築いており、正面を除く3辺の傾斜法面に角柱状の石材を横2列に並べた石列を廻らせている。正面には大型長方形礫石を据え、基壇状を呈していた可能性がある。この石列の位置での土壇の規模は横幅約14m×奥行約9mである。また塚の高さは現状で3mほどであるが、江戸時代の周囲の地表面は、現在よりも2m以上低かったことが確認されている。

石塔は、調査以前は3基とも残闕の状態であったが、発掘により出土した石材を加えると五重塔3基分がほとんど揃った。その成果によれば、中央が大きく左右がやや小ぶりの五重石塔3基が横一列に設置されていたと考えられ、そのように復元整備されている。相輪は見つかっていないが、それも推定して復元された高さは中央石塔で5.5mである。各塔の各層軸部四面には仏龕を穿ち、如来坐像を浮彫にしている。龕外側には線刻で仏殿の戸を開いた様相が表現され、笠石の軒下には垂木を表現した朱の彩色が残る。3塔とも初層軸石の上面に方形の孔を彫り込んでいることが修復時に確認され、何らかの納



図1 隼人塚周辺図
(旧版地形図縮尺1/5万「加治木」「国分」図幅を1/2に縮小)



図2 隼人塚全景

入物があつたと考えられるが残されていない⁴⁾。

四天王像は、調査以前には2体が壇上の正面向かって右手前(東角)、左手前(南角)に位置し、残りの2体は南側裾に下半身が埋没した状態で置かれていた。正面右手前(東角)の像は、発掘の結果により基台の石材が当初の位置を保っていると考えられている。これをもとに、四天王石像は塚上面の四角に配置されていたと推定され、現状に整えられている。像は足元の正方形の台座(邪鬼兼用)から頭部まで一石から彫り出しており、兜内・顔面にはわずかに朱・肌色の彩色が残る。また、台座の側面には邪鬼を刻み出している。

出土遺物は、弥生土器、須恵器のほか13世紀後半の龍泉窯系青磁、16世紀の明の染付・翡翠釉陶器、江戸時代以降のものなどがあるが、基壇の版築造成土内からはいまのところ遺物が出土していないため、塚の築造年代は遺物からは確認できていない。

隼人塚は石塔と四天王を配置しているので、仏教関係の土壇であることは間違いなく、これ自体を土製の仏塔とみることも不可能ではない。しかし、堺市大野寺土塔や奈良市頭塔あるいは赤磐市熊山遺跡のように⁵⁾、土壇の仏塔は平面が正方形である。また、これを建物基壇とすることも考えがたい。柱などの痕跡が見つからないことや、石塔3基を内部に安置する建造物は想定しにくいからである。隼人塚は平面が横長の長方形である点に特徴がある。この形状は、壇上に石塔3基を設置する目的に規定されたものであろう。仏塔とは異なる観念によって築造されたものと考えられる。

隼人塚の設置に関わるような史料は、今のところ知られていない。後世の史料で、これに言及したのものとして紹介されているのは、以下のよう

ものである。

年未詳「大隅正八幡宮神社次第」(正八幡宮旧道家桑幡家文書)⁶⁾のうち「御四至境内所々」の項に、放生会ノ大路ニ五重ニ三基ノ石塔有、四天王ノ石像在、とあり、形状などから現在の隼人塚を指すとみられる。前近代における同遺跡の存在を示す。また、塚

の横を通り海に向かう古道が放生会の大路と呼ばれていたことも知られる。隼人塚ではないが、同文書の境内の「諸堂塔」の項には、

一切経蔵七重石塔〔在四天王石像大門一字二王左金剛力 右力士〕

とある。写し崩れがあり、経蔵・石塔・大門は別項目であろう。八幡宮の境内の記述であるから、同宮境内にも石塔と四天王石像が存在していたのである。四天王石像とセットになっていることからすると、これも壇を伴っていたと想像されるが、石塔の数が記されないから1基の石塔を中心とした方形の土壇、つまり仏塔であったとも考えられる。1991年に神社境内から等身大の天部の石像の破片が出土しており、この史料の四天王石像に該当する可能性が高いとみられている⁷⁾。石塔と石像四天王という組み合わせの構造は隼人塚と共通しており、隼人塚が八幡宮と共通の主体により造営されたことを窺わせるものである。なお、天保14年(1843)成立の『三国名勝図会』⁸⁾に描かれた正八幡宮境内の図には、五重の石塔が2カ所に描かれており、これと関係するかもしれない。

年未詳「大隅国桑原郡鹿兒島神社旧記」(桑幡家文書)の「御神事之抜書」⁹⁾の項には、8月19日の放生会に関する記述があり、次のように記す。

御神輿浜殿御下ノ時、御供ノ騎馬武士貳百六十甲先例也、御神輿浜殿御下ノ時、御休ミ玉フ石有之、和銅元年ニ建立ノ石也、別冊ニ放生会ノ大路ニ五重ニ三基ノ石塔有リ、四天王ノ石像有リ、

『三国名勝図会』の正国寺の項¹⁰⁾にも関連する記事がある。同寺は隼人町内山田宇津山に所在した八幡宮の神宮寺で、後に廃寺となっている。『図会』には、同寺が正八幡宮の本地所3カ寺の一つで奈良の律宗西大寺の末寺であること、元寇に際し亀山天皇が逆徒追伐、天下泰平祈願のため西大寺観尊に一国に一寺を建てさせたいうちの一寺であると伝えていたこと、由緒書に元徳2年(1330)創建としていたことを記している。正国寺が西大寺末寺の律宗寺院であったことは、西大寺の末寺帳によって確認できる¹¹⁾。しかし、観尊が天皇の命により一国一寺を建てたという事実が知られていないことを『図会』が指摘している。同書は続けて次のように記している。

当寺筒蔵の本所御教書に暦応元年(1338)正宮放生大会を行ふべき院宣を下されしと見へたり、当寺中古までは、当村の原口〔今の寺地より巳方十町許〕といへる所にありて、正宮の戒壇所と名つけ、八月十五日浜殿くだりの時、神輿を安鎮し放生会ありしとぞ、今其神事絶てなし、例年其式のみあるよしいへり、其旧寺地に四天王〔多聞天・持国天・増長天・吉祥天〕の石像及び五重の塔二基残れり。

正国寺が所蔵していたという暦応2年(1339)の本所御教書は、いまでは「正八幡宮講衆・殿上等訴状」として桑幡家文書に含まれており、その文末に、同年放生会を行うべき院宣、御教書を賜ったという添え書きがある¹²⁾。これらから知られるのは、現在の隼人塚は、かつて正八幡宮放生会において神輿が浜へ向かった放生会の大路の途中に位置しており、ここに神輿を安置する儀式が伝承されていたこと、その場所は正宮の戒壇所といい、正国寺がもとはここにあったと伝えられていたことなどである。隼人塚は正国寺境内の施設であり、放生会に関わる施設ということになるが、こうした言説がどの程度事実を伝えているのかを確認することは難しい。戒壇は界壇のことかもしれない。

他方、正国寺の建立年次が平安時代に遡る可能性を示す遺物も見つかっている。正国寺は『図会』の段階では内山田宇津山に移転していたが、その廃寺跡から1983年に3体の石仏(如来形2体・観音形1体)が見出され、そのうちの如来・観音の光背には「康治元年九月四日供養」という銘文が確認された¹³⁾。また銘文のない如来形も平安仏を思わせるものである。これにより、正国寺の創建は康治元年

(1142) 以前に遡る可能性があることになる。正国寺の移転がいつのことかは分からないが、これらの石仏が正国寺とともに移転したとすれば、同年以前にすでに旧寺地すなわち隼人塚の地点に寺院が設置されていたことになる。

この正国寺石仏に関しては、大隅国分寺跡に残る凝灰岩製石塔にも同年の銘文のあることが注目されている¹⁴⁾。同時期に双方で石造物が造顕されていることから、平安末期の大隅国分寺と正国寺が何らかの関連をもっていたとも考えられる。ちょうどこの時期は、大隅正八幡宮の執行行賢が正八幡宮の勢力拡大に尽力していた時期にあたり、康治元年9月には八幡正宮執印として台明寺に所領を寄進している¹⁵⁾。大隅国分寺跡石塔や正国寺石仏の作製は、こうした動きと関係する可能性も考えられ、隼人塚もこのような宗教政策の一環として築かれたとも想像される¹⁶⁾。

II 四天王石像と石塔と土壇

文献史料、発掘調査成果から隼人塚の性格を明らかにすることは難しい。そこで次に隼人塚の特徴とすべき四天王石像の形態などを検討しよう。四天王は須弥壇の四方などに安置される一般的な天部であるが、隼人塚の四天王像は極めて個性的なものである。4体ともに獅噛の兜をかぶる点をはじめとして、さらに2点の特徴がある。1点目は、剣もしくは刀を地面に立てる像が含まれていること、二つ目は、それが2体（西・南）含まれ、しかもそれぞれの形状が異なることである（図3）。その2体について具体的にみると、南の石像は右手で刀の柄を掴み地面に突き立て、左腕は右腕の上に交差させて置く（以下、Aタイプとする）、西の石像は、左右両手で剣の柄を握り地面に垂直に突き立てている（以下、Bタイプとする）（図4）。



図3 左：西像（Bタイプ）、右：南像（Aタイプ）

このようなものをふくむ四天王の構成および各像の形態は、多数存在する四天王の彫像や画像にその類例を見つけることが難しいが、はやくは藤浪三千尋氏は、玄証筆とされる治承3年（1179）「十六善神図像」（東京国立博物館蔵）¹⁷⁾（図6）のなかの4体の神将が、隼人塚四天王石像と多くの共通点を持つという重要な指摘をされている。同図の十六善神の中には、東方以下、西南北それぞれを注記した四神将が含まれ、その方角注記から、それらは四天王にあたと考えられる。いずれも兜をかぶる点が隼人塚石像と合致する。各図像をみると、南方と注記のある像が、前述の隼人塚南石像Aタイプと合致している。また、東方とある図像は、左手に三鈷剣を持ち刃先を上方へ向け、右手は三鈷杵を握る手を大きく振り上げる姿態であり、隼人塚の東石像と合致している（図5）。残りの2体のうち、現北角の石像は両肩から先を欠失しているので明確な比定はできないが、残存部分からみると図像の西方像に一致しているとみてよい。残り1体は現西角の石像Bタイプであるが、該当する図像の北方の神将とは全く様相を異にしている。図像に描か

れているのは、北方天としてポピュラーな左手を胸から肩の高さにあげ掌の上に宝塔を置く多聞天、すなわち北方鎮護として独自でも祀られる毘沙門天である。

石像・画像双方に共通するAタイプの神将は、他の四天王の彫像、画像に作例はあるものの一般的ではない。彫像は興福寺北円堂（もとは奈良大安寺）や唐招提寺の極めて古い像にのみ見られ、中世にはそれを模した像がわずかに知られる¹⁸⁾。画像における作例自体は少ないが、『別尊雑記』巻47、「浄瑠璃寺吉祥

天厨子扉絵」などを除くと、その多くは十六善神図のなかの四天王の1体である¹⁹⁾。つまりAタイプの神将は十六善神図に特徴的な形態といてよいものである。同図は大般若経転読の法会の際に本尊として懸けるもので、般若菩薩または釈迦三尊を中心にして周囲に十六善神などが配置される。平安時代に遡る作品はわずかであるが、鎌倉時代以降は多数の作品が残されている。記録では、『中右記』永久2年（1114）7月21日条に白河法皇の御所で大般若経を転読するため、釈迦像、十六神王像を図絵したとある記事が初見とされ、『兵範記』保元3年（1158）7月25日条には高倉殿での大般若経の本尊として「御仏三尺釈迦在十六善神、〔已上図絵一幅半〕」とある²⁰⁾。

Aタイプの彫像が含まれるということは、藤浪氏が示唆されたように、隼人塚の構成が十六善神図と深く関係していることを物語っており、その画像を本尊とする大般若経転読の仏事との関連が推定される。隼人塚の土壇が横長の長方形で、中央を大型とする3基の石塔を並置する特殊な形態であるのは、三尊仏を象徴していると見ることができる。塚が十六善神図を踏まえているとするなら、石塔は同図の本尊である釈迦三尊に擬することができる。それはまた、八幡三神をも含意しているかもしれない。

いっぽう隼人塚Bタイプの神将像は、四天王としては極めてまれな形態であって、彫像の例を見出すことは出来ていない。画像では、薬師十二神将の1体としての事例があり、平安時代に遡る十六善神図の遺品として知られる七寺一切経唐櫃中蓋の密陀絵に例がある²¹⁾。後者は四天王として描かれたかどうか判然とせず特例といてよい。隼人塚にこのBタイプの神将が含まれている点は、この施設の特異性をはっきり示すとともに、その由来を追及する手掛かりとなる。



図4 左：南像部分（Aタイプ）、右：西像部分（Bタイプ）



図5 左：東像、右：北像



図6 玄証「十六善神図像」(部分)。画像提供：東京国立博物館

左：西方 右：南方 (Aタイプ)

左：東方 右：北方



図7 寧波の武神石像(註23『南宋石彫』より)

ところで近年、九州に分布する薩摩塔の研究を推進されている井形進氏は²²⁾、同塔が中国の寧波に由来する13世紀を中心とする石塔であること、その軸部四面に刻まれる4体の神将のうち2体が剣・刀を地面に立てるタイプの像であること、中国の寧波郊外の東銭湖周囲には同タイプの神将と酷似する武神石像(図7)が多数存在することなどを指摘され、隼人塚についても、「四天王のうち2躯が、剣ないし刀を地面に突き立てる姿は、大陸から影響を受けた可能性がある」とされた。前述のとおりBタイプの神将は薬師十二神将として日本の絵画資料にもわずかに見えるが、寧波の武神石像と隼人塚のBタイプ石像の姿は酷似しており、井形氏の指摘通り南宋からの影響を考えるべきであろう²³⁾。さらに、隼人塚四天王像が他に例を見ない一石の等身大の石像である点も、寧波の武神像が大型の石像であること、屋外に立つことと共通し、その影響を考えることができる。

隼人塚の石塔は各層に軸部を持つ南九州に多い形式で、同形式の大隅国分寺跡の石塔と比較されるが、各軸部の四面に仏龕と仏像を彫り出す点は異なっている。四面の仏像は平安時代の趣を残すものであるが、各層の軸部に仏龕を穿ち仏像を浮き彫りにする形式もまた、南宋に由来する可能性がある。

面

屋外に基壇を築き石塔を建てる施設として想起されるのは、奈良般若寺の十三重石塔である²⁴⁾。それは平面方形の基壇を築き中央に石塔を据えるので、全体としての仏塔であるが形式は隼人塚に通じる。般若寺の石塔は、南宗の明州から渡来し東大寺造営に関わった石工伊行末によって建長5年(1253)頃に完成したものである。ちなみに東大寺では、復興時の建久7年(1196)に宋人4人によって石造の四天王像などが製作されている²⁵⁾。般若寺の大型基壇と石塔という珍しい形式は、南宋に由来する可能性が考えられる。

以上の諸事象をもとにして、隼人塚の性格を想定すると以下の通りである。隼人塚は大般若経に対する信仰に基づいて、転読法会の本尊釈迦十六善神図のうち中心の釈迦三尊を視覚的に鎮護を象徴する石塔で表し、破敵の神将である四天王を武威を明確に表現する等身大の石像として、全体を立体的に造形した宗教遺跡であると考えられる。それは一時の法会用の施設ではなく、大般若経の威力により恒常的に外敵を防ぎ境界の内側が守護されていることを象徴する施設として、大地に据え付けられたランドマークであった。石造による立体化という形式をとる契機となったのは、南宋の寧波付近の石造文化に関する情報の到達であろう。その影響は全体の形態だけではなく、四天王のうちの1体を寧波に見られる武神像(すなわちBタイプ)に置き換えるという点に顕著である。剣を立てるBタイプ像は、外敵進入を阻止する武威をよりいっそう強調する意図によって採用されたと想像される。しかもそれが北方鎮護とされる多聞天(毘沙門天)と置き替えられたことは、日本の南端の国府に近接していることと対応し、この施設が対外的な守護を強く意図したことを示唆していると思う。この塚の築造は、対外情勢と関係している可能性が強い。

III 築造の背景をめぐって

放生会と正国寺と隼人塚の関係伝承、石像天部や石塔の存在の共通性、塚の規模と位置などからみて、隼人塚と正八幡宮は何らかの関係があると考えられる。そこで正八幡宮の史料をみると、平安時代後半から大般若経関連の法会が始められていたことが判明する。これは寺社一般において行われる法会ではあるが、正八幡宮ではことさらに、長久年中(1040)に国司が寄進した始良庄を財源として四季大般若経転読が開始され、保安年中(1120)からは藤原忠実が寄進した帖佐郷を財源として百日大般若最勝講が行われていた²⁶⁾。両方の所領ともに建久8年(1197)「建久図田帳」に見え、特に前者は国司寄進の50丁余の荘園であることから²⁷⁾、その法会は国衛の意向による重要な国家的法会とみられ、正八幡宮の主要な神事法要であったことが窺える。

正国寺は奈良西大寺の末寺となっているので、隼人塚と律宗との関係もいちおう考えられる。前述のように般若寺の十三重石塔は、南宗の石工伊行末が建立した。その般若寺を復興し西大寺の末寺とした叡尊は文永10年(1272)に伊勢神宮に参拝し、11年8月には石清水八幡宮で神前読経を行い同宮の放生会を始めたという。その年の10月に元軍が来襲し、翌建治元年(1275)には新たに描かせた釈迦三尊並びに十六善神像などを持参して再び伊勢神宮に参拝している。伊勢には忍性が鎌倉から船で送らせた宋版大般若経も届いており、国内の安全と異国の降伏が祈られた²⁸⁾。『図会』に伝える叡尊の正国寺建立はそのままでは信じられないが、こうした叡尊の宗教政策が大隅国にも影響した可能性は考えられる。

大隅国には鳩脇八幡崎という外港があり、正八幡宮の社家跡から中国の文物が出土するように、この付近は畿内経由とは別に中国の文化が及んでおり²⁹⁾、隼人塚にみられる南宋の石造文化の摂取もそのような環境が促したのであろう。

むすび

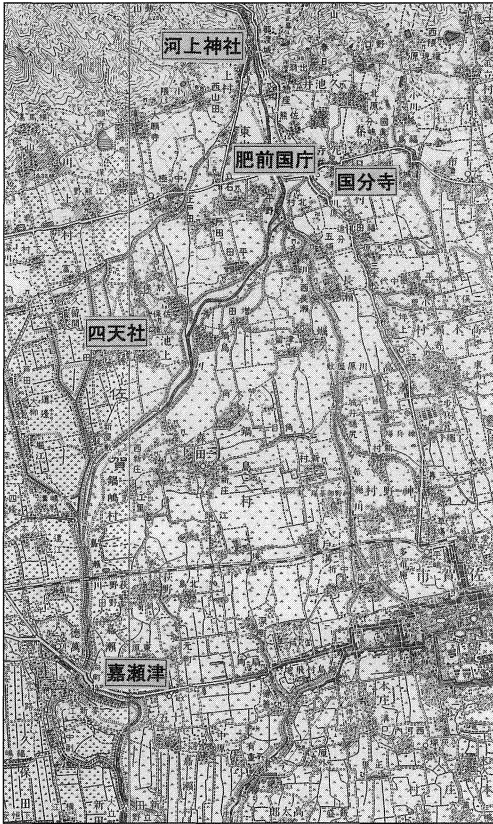


図8 佐賀四天社周辺図

旧版地形図縮尺1/5万「小城」「佐賀北部」図幅を1/2に縮小)

隼人塚は、院政期から顕著になる正八幡宮での大般若経転読法会、行賢による正八幡宮の勢力拡大、元寇に伴う律宗の宗教政策などのいずれかを契機として、その時点での南宋の石造文化物の多大な影響を受けて造顕されたのであろう。遺跡の年代が考古学的に明らかになっておらず、石造物の年代観にも幅がある現段階では、これ以上突き詰めることは困難である。しかし、院政期以降の対外情勢への宗教的対策として生み出された希有な遺跡であるといつてよいと思う。

すでに紹介されているが、これに類する遺跡が佐賀県にも存在する³⁰⁾。佐賀市大和町池上の四天社である(図8)。古墳を整形したとみられる平面方形、断面台形の土壇の中央に室町期とされる宝篋印塔(大日如来とされる)を据え、四方の隅近くに像高1m10cmほどの四天王石像が外側をむけて置かれている。玄証「十六善神図」と比較すると東方天の姿態が左右反転しているほかは4体とも合致しており、隼人塚と同じく大般若経信仰という思想的背景が想定される。ただし、Bタイプは含まれていない。同社は平野に孤立するが、東北約4km付近に肥前国庁跡、興止日女神社(淀姫神社・河上神社)、国分寺跡があり、南約5kmには嘉瀬津の地名がある。後

者は『平家物語』に、鬼界が島の藤原成経へ物資を送り、成経帰郷時にはここに滞在したと記されている平教盛の所領鹿瀬庄の故地とされる所である。津という地名が示すように有明海から外洋へ続く港があったらしい³¹⁾。大隅の隼人塚の南方に、放生会で神輿が下ったという浜の市、『平家物語』長門本に成経が寄港したという鳩脇八幡崎が所在することが想起される。隼人塚の性格や立地に関して、四天社と比較することにより、さらに理解が深められるであろう。

註

1) 『鹿児島県史蹟名勝天然記念物調査報告』(鹿児島、1926年)に、もとは「菩提寺の塚」と称したが鹿児島神宮の神官が熊襲塚と命名し、後に隼人塚となったとする。藤浪三千尋『隼人塚の歴史』(鹿児島県隼人町、私家版、1994年)に、「隼人塚」の名称は後述する近世の記録にも見えず1903年刊の『国分の古蹟』が初見で、1902年測図の旧

版地形図には「軍神塚」と記されていることが指摘されている。四天王石像の年代は、石塔および後述する康治元年(1142)の正国寺跡出土石仏と同時期とみる説(上村俊雄「隼人塚石造物の成立時期について」[隼人文化研究会編『隼人族の生活と文化』、東京、雄山閣、1993年、初出1976年]; 藤浪前掲書)、石塔は平安時代だが四天王は鎌倉

- 末・南北朝初めとする説（八尋和泉「九州西大寺末寺の美術遺品」『佛教藝術』199号、東京、1991年）がある。
- 2) 藤浪、註1前掲書が、それまでの諸研究を踏まえ多様な観点から検討した基本文献である。本稿も同書に負うところ多大である。
 - 3) 『隼人塚—山跡遺跡発掘調査概報—』（鹿児島県隼人町、同町教育委員会、1998年）；『国指定史跡隼人塚 ガイドブック』（鹿児島県隼人町、同町教育委員会、2001年）。
 - 4) 註3前掲ガイドブック；藤浪三千尋『隼人町の石造文化財』（鹿児島県隼人町、同町教育委員会、1995年）；同「宮内地区の石造文化財」（『大隅正八幡宮関連遺跡群—総合調査報告書—』、霧島、同市教育委員会、2011年）。
 - 5) 近藤康司『行基と知識集団の考古学』（大阪、清文堂、2014年）；『史跡頭塔発掘調査報告』（奈良、奈良国立文化財研究所、2001年）；熊山町教育委員会『熊山遺跡』（岡山県熊山町、1975年）。
 - 6) 鹿児島県維新史料編纂所編『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺家わけ十』（鹿児島、2005年）、159頁；日隈正守「宮内地区の古文書・古地図」（『大隅正八幡宮関連遺跡群—総合調査報告書—』、霧島、同市教育委員会、2011年）に写真が掲載されている。他に文政6年（1823）の『道記』（霧島市立国分図書館）には、隼人塚を指す「四天の元迄」「四天王の元江」という記述があり、同年代には四天王として、また道の区切点となるようなランドマークとして認識されていたことがわかる（藤浪、註1前掲書）。
 - 7) 註2・3・4前掲諸文献。現在、隼人塚史跡館に展示されている。
 - 8) 『三国名勝図会』巻31 鹿児島神社（『日本名所風俗図会』15、東京、角川書店、1983年）、477頁。
 - 9) 鹿児島県維新史料編纂所編、註6前掲書、200頁。
 - 10) 『三国名勝図会』巻31 正国寺（註8前掲書）、485頁。
 - 11) 松尾剛次「中世観尊教団の薩摩国・日向国・大隅国への展開—薩摩国泰平寺・日向国宝満寺・大隅国正国寺に注目して—」（『山形大学人文学部研究年報』第9号、山形、2012年）。
 - 12) 鹿児島県維新史料編纂所編、註6前掲書、158頁。
 - 13) 註2・3・4前掲諸文献。
 - 14) 註2・3・4前掲諸文献。
 - 15) 康治元年九月廿日「大隅国正八幡宮執印行賢寄進状案」（台明寺文書）（『平安遺文』第6巻2479号）；五味克夫「大隅国正八幡宮社家小考」（竹内理三博士古稀記念会『続荘園制と武家社会』、東京、吉川弘文館、1978年）；日隈正守「『石清水文書目録』に関する一考察」（『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』63号、鹿児島、2012年）。
 - 16) 藤浪、註1前掲書。
 - 17) 『東京国立博物館図版目録 仏画篇』（東京、東京美術、1987年。東京国立博物館ホームページの画像検索で写真閲覧可能）；石田尚豊「仏画稿本（東博保管）と玄證本」（『MUSEUM』第210号、東京、1968年）参照。
 - 18) 友鳴利英「大安寺四天王像序論 広目天像の形姿復元と大刀を突く神将像」（『文化財学報』第25集、奈良、2007年）。中世では、旧大安寺像を模した香川県鷲峰寺の四天王像（『重要文化財』4、毎日新聞社、1974年、No52；猪川和子『四天王像』日本の美術240、東京、至文堂、第16図）、日田市永興寺の四天王像（『重要文化財』4、No50；八尋、註1前掲論文）などがある。
 - 19) 『大正新脩大藏経』図像第3巻 図像 No254；林温「旧浄瑠璃寺吉祥天厨子絵造尊をめぐる問題」（『佛教藝術』第169号、東京、1986年）。十六善神図では前述の玄証筆のもののほか、東京国立博物館保管「十六善神画像」（林温「東京国立博物館保管・十六善神画像」『MUSEUM』第433号、東京、1987年）、西大寺蔵「釈迦三尊十六善神像」（『奈良西大寺展』、東京、日本経済新聞社、1990年）、禅林寺・聖衆来迎寺・園城寺の各寺所蔵「釈迦三尊十六善神図」（『西遊記のシルクロード 三蔵法師の道』図録、東京、朝日新聞社、1999年、178・180・182番）など。
 - 20) 十六善神図については林、註19前掲論文；同「図案集としての武将神図像」（『佛教藝術』第216号、東京、1994年）；小島登茂子「七寺一切経唐櫃中蓋漆絵に描かれた十六善神像とその周辺」（『愛知県史研究』第8号、名古屋、2004年）；佐藤大「釈迦十六善神像の図像に関する考察—南都系を中心として」（『鹿児島美術財団年報』別冊24号、東京、2006年）など参照。
 - 21) 『醍醐寺本薬師十二神将図』下（『大正新脩大藏経』図像第7巻 図像 No40）；『愛知県史』別編

- 文化財 2 (絵画) (名古屋、2011年)。
- 22) 井形進『薩摩塔の時空』(福岡、花乱社、2012年)。
- 23) 武神石像を含め、寧波の石造物の日本への影響については、山川均『中世石造物の研究』(東京、日本史史料研究会、2008年)；同編『寧波と宋風石造文化〔東アジア海域叢書10〕』(東京、汲古書院、2012年) 参照。同地の石造物については、楊古城ほか『南宋石彫』(中国、寧波出版社、2006年)。
- 24) 『重要文化財般若寺塔婆修理工事報告書』(奈良、奈良県文化財保存事務所、1965年)；『大和古寺大観』第3巻(東京、岩波書店、1977年)、86頁。
- 25) 『東大寺造立供養記』(『群書類従』24)。
- 26) 暦応2年11月「正八幡宮講衆・殿上等訴状」(桑幡家文書) (鹿児島県維新史料編纂所編、註6前掲書)、155頁。正八幡宮における大般若経転読法要と始良庄寄進の意義などについては、日隈正守「大隅国における建久岡田帳体制の成立過程」(『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』60号、鹿児島、2009年) 参照。
- 27) 建久8年「大隅国岡田帳写」(桑幡家文書) (『鎌倉遺文』第2巻924号)。
- 28) 和島芳男『叡尊・忍性』(東京、吉川弘文館、1959年)；『金剛仏子叡尊感身学正記』下(『西大寺叡尊伝記集成』、奈良、奈良国立文化財研究所、1956年)、39頁。
- 29) 重久淳一「中世大隅正八幡宮をとりまく空間構造—社家館跡の調査から—」(『地域政策科学研究』7、鹿児島、2010年)；『大隅正八幡宮—総括報告書—』(霧島、同市教育委員会、2013年)。
- 30) 永山修一「キカイガシマ・イオウガシマ考」(笹山晴生先生還暦記念会編『日本律令制論集』下、東京、吉川弘文館、1993年)。
- 31) 松本隆昌「佐賀県四天神石造四天王像—佐賀県佐賀郡大和町所在の丸彫石造四天王像について—」(『佛教藝術』第251号、東京、2000年)。なお、薩摩国府付近にも隼人塚と類似する3基の石塔と小型の天部石像が残されている(上村、註1前掲論文)。

(富山大学人文学部教授)
 <2014年7月22日受付>

◆ 書 棚 ◆

▷ 岡村道雄著『縄文人からの伝言』

縄文人は、現在に何を伝えたかったのだろうか。何とも刺激的な題である。もちろん題にある縄文人の伝言とは、縄文時代研究の成果から現代人がその考え方等を実生活に生かしてゆくことであるといえる。最初に筆者は縄文的な生活を実践すると宣言する。では、筆者が描く縄文時代生活とはどのようなものか。それは、自然との共生である。これは今までの研究でも述べられたことであるが、本書の特徴は縄文研究から見いだされた様々な技術や思想を現在へ生かすということが結論となる点であろう。

縄文的生活文化の終わりという最終章の題とは裏腹に昭和30年代からの高度経済成長を取り

上げる。この時代を新石器革命、日本における水稻耕作の成立などととも第3の画期として評価する。一方で、自然との共生を保ちながら精神的な豊かさをもつ縄文社会と対極の現代社会を憂う。そして、今こそ、縄文的な自然をうまく生かした生活を取り入れることを提唱する。この点が、筆者の縄文研究から導き出された現代社会への研究成果の還元である。

もちろん、本書の大半は縄文文化、社会について述べられており、縄文女性の一生やアイヌに見られるような送りの儀礼について語る点は縄文文化・社会の新たな一面も描き出している。

新書判、本文200頁、東京、集英社、2014年7月刊；
 本体価格720円＋税；ISBN：978-4087207460